5. 砂浜の生きもの

砂浜は入り江などに砂が集まってできている海岸をさします。山陰海岸には大小さまざまな砂浜があり、海の中を含めてそこにはさまざまな生きものがくらしています。

両側を磯場に囲まれた
小規模な砂浜海岸（ポケットビーチ）

魚類

ヒラメ（ヒラメ科）
Paralichthys olivaceus

体長5cmほどの稚魚が浅場で観察される。口が大きく、両眼が体の左側にある。

クロウシノシタ（ウシノシタ科）
Paraplagusia japonica

体は平たく、細長いだ円形。稚魚から若魚が浅い砂浜海岸で観察される。

観察してみよう！ ⑩

砂浜の魚と言えば「シロギス」

シロギスは砂浜海岸にくらす代表的な魚で、体長が最大で30cmを超えるものもいます。山陰海岸の浅い砂地の海中でも、水中マスクを通してシロギスの泳ぐ姿を観察することができます。単に「キス」と呼ばれることも多く、全国各地の砂浜海岸でキス釣り大会が開催されるなど、釣りの対象としても人気の高い魚です。

山陰海岸での調査では、ほぼ一年中、砂浜海岸の浅場でシロギスの出現が確認されています。秋季の9月からは体長3cm前後の稚魚が数多く出現することから、夏季に産卵していると考えられます。砂浜海岸で一生を過ごす「シロギス」はまさに砂浜の魚と言えます。

シロギス（キス科）
Sillago japonica

（朝日新聞「生きもの通信 山陰海岸から（2014年3月4日掲載）」を参照）

シマウシノシタ（ササウシノシタ科）
Zebrias zebrinus

黒と白のしま模様が特徴。夜の砂地で観察されることが多い。

ネズミゴチ（ネズッポ科）
Repomucenus curvicornis

砂浜海岸でよく観察される。体の色は砂地の色とよく似ている。

ヒメジ（ヒメジ科）
Upeneus japonicus

一対（2本）の黄色いヒゲが特徴。体長5cmほどの稚魚が浅場で観察される。

ウミヒゴイ（ヒメジ科）
Parupeneus chrysopleuron

赤っぽい体に黄色がかった縦じまと口の下の白い一対のヒゲが特徴。このひげを前後左右に動かしながら、海底をはうように泳ぐ。

ホウボウ（ホウボウ科）
Chelidonichthys spinosus

鮮やかな青緑色の大きな胸びれが特徴。浅場では、体長5cmほどの稚魚が観察される。

砂浜の生きもの

キュウセン（ベラ科）
Parajulis poecileptera

メスからオスに性転換し、体の色も変化する。砂の中に潜って冬眠する。

クサフグ（フグ科）
Takifugu niphobles

浅場の砂地に身をひそめ、頭と眼だけを出していることが多い。体内に強い毒をもつ。

マダイ（タイ科）
Pagrus major

体長5～10cmほどの稚魚が浅場で観察される。淡いピンク色の体にコバルト色の小さな斑点がある。

観察してみよう！ ⑪

ウミヘビなのに魚？「ダイナンウミヘビ」

「ウミヘビ」と呼ばれる動物は、陸上でくらすヘビやトカゲと同じハ虫類と、ヘビという名前がつけられている魚類に分けられます。ハ虫類のウミヘビは、肺呼吸をするために海面まで上がってきて空気を吸います。それに対して、魚類のウミヘビは、他の魚と同じようにえらで呼吸ができるため、海底付近でじっとしている種類が多いです。山陰海岸の海中では、魚類のウミヘビが多く生息し、写真のダイナンウミヘビも魚類で、砂地の海底から頭だけを出している姿がよく観察されます。夜行性で、夕暮れ時には巣穴から出てきて、くねくねと海底近くを泳いでいることがありますので、海の透明度の高い日には、堤防などから海の中をのぞいてみてください。

ダイナンウミヘビ（ウミヘビ科）
Ophisurus macrorhynchos

（日本海新聞「何でも発見 たのしい観察83（2013年1月27日掲載）」を改変）

サビハゼ（ハゼ科）
Sagamia geneionema

砂地の海底でよく観察される。口の下の多数の白いヒゲが特徴。

ホシノハゼ（ハゼ科）
Istigobius hoshinonis

体の中央に破線状の帯がある。岩場近くの砂地で観察される。

スズキ（スズキ科）
Lateolabrax japonicus

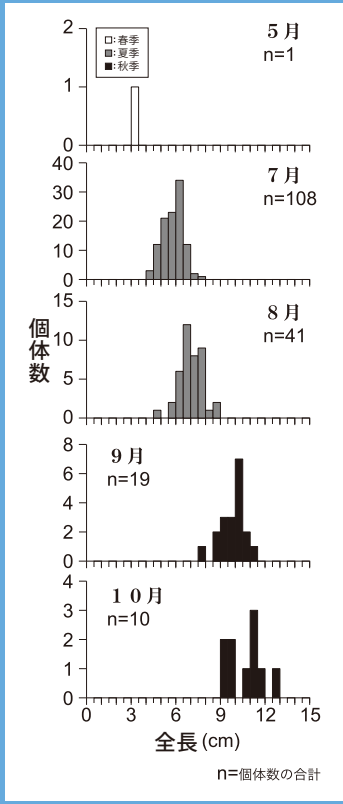
成魚は河口などの岩場に生息するが、体長5cmほどの稚魚は浅い砂浜海岸に出現する。

マゴチ（コチ科）
Platycephalus sp. 2

体長が60cmを超える大型の魚で、砂地の海底に身をひそめ、頭と眼だけを出していることが多い。

コラム④　稚魚のゆりかご「砂浜海岸」

砂浜海岸の中で、波が当って崩れる波打ち際の一帯を「サーフゾーン」と言います。このサーフゾーンの海中には、多くの稚魚がくらしています。山陰海岸での調査では、シロギス・ヒラメ・クロウシノシタ・スズキ・マダイなどの稚魚が多く見つかり、これまでに約60種類の稚魚が確認されています。また、それぞれの種類の稚魚が砂浜海岸のサーフゾーンを成長の場として利用していることが明らかになっています。一見、あまり生物が生息していなさそうにも見える砂浜海岸ですが、稚魚の保育場（ゆりかご）として重要な役割を果たしています。



砂浜海岸における
マダイの月別全長組成

砂浜海岸で採集された稚魚

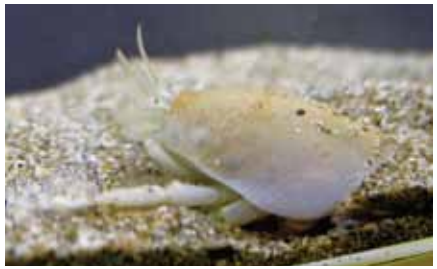
地曳き網調査の様子

カニ・ヤドカリのなかま（甲殻類）

キンセンガニ（キンセンガニ科）
Matuta victor

甲幅は5cmほどで、甲らの両側の大きなトゲが目立つ。遊泳脚をもち、砂地に潜って身をかくすこともできる。

ハマスナホリガニ（スナホリガニ科）
Hippa truncatifrons



甲幅が1cmほどで、砂浜の波打ち際で観察される。ヤドカリのなかま。

観察してみよう！⑫

夜の砂浜で「スナガニ」の観察

スナガニの体の色は砂浜の色によく似ていて、大きな眼とすばやい動きが特徴です。砂浜海岸のおもに波打ち際で、砂地に直径3cmほどの巣穴を掘ってくらしています。おもに夜行性のカニで、夕暮れになると巣穴から出てきて活発に活動します。6月から9月の天気の良い日の夜に、懐中電灯を片手に砂浜を歩いてみてください。多くのスナガニに出合えるはずです。

自然が多く残された砂浜では数多くのスナガニが観察されますが、人の手が加えられた人工的な砂浜ではその数が少ない傾向があります。スナガニの数は自然環境や人為的な影響の度合いを表す“ものさし”としても注目されています。

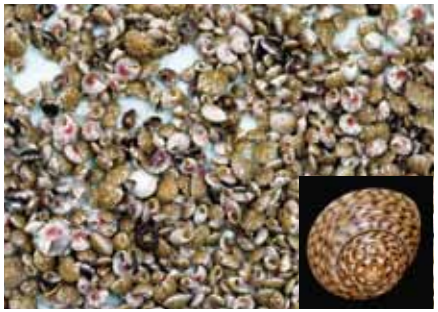
スナガニ（スナガニ科）
Ocypode stimpsoni

エビジャコのなかま（エビジャコ科）
Crangonidae sp.

砂浜海岸の浅場に生息する。はさみ脚が鎌状になっているのがこのなかまの特徴。

巻き貝・二枚貝・イカ・タコのなかま（軟体動物）

キサゴ（ニシキウズガイ科）
Umbonium costatum



貝殻の大きさは2cmほど。光沢のある黄色みがかった殻に黒褐色の斑点がかすり状に並ぶ。

ムシボタル（マクラガイ科）
Olivella fulgurata

貝殻の大きさは1cmほどで、うすく光沢がある。殻は淡黄白色で、黒褐色や栗色の木目模様をもつ。

ナミノコガイ（フジノハナガイ科）
Latona cuneata

貝殻の大きさは3cmほど。砂の中にもぐって生息し、波の動きに合わせて波打ち際を移動する。

キュウシュウナミノコ（フジノハナガイ科）
Latona kiusiuensis

貝殻の大きさは1cmほどと小さい。浅い砂浜海岸に生息し、波打ち際で多くの貝殻が見つかる。

コラム⑤　形も色も美しい打ち上げ貝

冬の日本海は夏の穏やかな海とは一変し、高波の多い日が続きます。そんな冬の海岸にも、ステキなこともあります。冬の荒波は、さまざまな色や形の貝殻を海岸にたくさん打ち上げてくれます。その美しさは、私たちの心を温めてくれます。きれいなピンク色のサクラガイのなかま、扇形のイタヤガイ、カラフルなナデシコガイ、タカラガイのなかまなど、浦富海岸には約400種類の打ち上げ貝が知られています。拾った貝殻をきれいな箱に入れて部屋で飾ったり、アクセサリーを作ったり、種類ごとに分けてコレクションにしたりといろいろな楽しみ方があります。

冬の海岸

貝殻拾いのポイントは、貝殻がたくさん打ち上がる場所を見つけることです。両端が磯で囲まれた砂浜には、打ち上げ貝が集まりやすいので、貝殻拾いに適しています。また、貝殻拾いに行く日も重要です。高波が落ち着いた2～3日後が狙い目です。朝早く起きて、貝殻拾いに出かけると、思いもよらない美しい貝殻に出合えるかもしれません。寒い冬でも楽しめる貝殻拾いにぜひ挑戦してみてください。

海岸に打ち上がった貝殻

（日本海新聞　「何でも発見 たのしい観察73（2012年11月11日掲載）」を改変）

ナデシコガイ（イタヤガイ科）
Chlamys iregularis

ベニガイ（ニッコウガイ科）
Pharaonella sieboldii

メダカラ（タカラガイ科）
Cypraea gracilis

ダンゴイカ（ダンゴイカ科）
Sepiola birostrata

胴長が2cmほどの小型のイカ。海底の砂地に生息し、腕の吸盤が2列であることが特徴。

ミミイカ（ダンゴイカ科）
Euprymna morsei

ダンゴイカと比べて大きく、胴長は4cmほど。腕の吸盤は4列である。

イイダコ（マダコ科）
Amphioctopus fangsiao

胴長10cmほどの小型のタコ。海底の砂地に生息し、腕のつけ根にある左右一対の丸い眼状斑（眼のような模様）が特徴。

カミナリイカ（コウイカ科）
Sepia lycidas

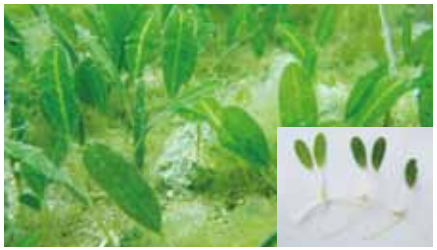
胴長30cmを超える大型のコウイカ類。胴の背側にある多数の眼状斑が特徴で、浅い砂地の海草などに産卵する。

海草

アマモ（アマモ科）
Zostera marina

内湾の砂泥域に生育する。体は地下茎と細長い葉からなる。地下茎をかじると甘く、これが名前の由来。

ウミヒルモのなかま（トチカガミ科）
Halophila sp.



内湾の砂泥域に地下茎を伸ばして生育し、茎から直立する葉を出す。

コラム⑥　「海草」と「海藻」のちがいって何だろう？

“かいそう”を漢字で書くと、「海草」や「海藻」となりますが、どちらが正しいのでしょうか？ 実はどちらも正しいのです。“海草”と“海藻”はそれぞれ別々のなかまを指すので、正しく漢字を使い分けるには、その区別を知っておくことが必要です。

アマモの花（左）・種から発芽したアマモ（右）

「海草」は、海にくらす陸上植物（被子植物）のなかまのことで、根から水や養分を葉へ運ぶ通路（維管束）を持ち、花が咲き、種もつくります。進化の過程で、一度は海から陸へと上がったのですが、再び海に戻った植物群が“海草”なのです。このことから、「海藻」と区別するために、海草を“うみくさ”と呼ぶこともあります。よく知られている海草にアマモがあります（P48）。アマモは、多くの生きものを育む海の森（アマモ場）をつくることやジュゴンのエサになることが知られています。

藻場に集まる魚たち

一方、「海藻」は、海の中で目に見える大きさに生長する植物のうち、陸上植物のなかま（海草）を除いたものを指します。ワカメやヒジキなど、みなさんが日頃から目にしたり、食べたりしている“かいそう”はほぼ“海藻”なのです。海藻は海草のように進化の過程で海から出たことはなく、維管束もなく花も咲きません。ですが、大型の海藻は、アマモと同じように、豊かな海の森（藻場）をつくり、稚魚の隠れ家やアワビ・サザエのエサ場などとして大切な存在でもあります（P32-33）。

“海草”と“海藻”は読み方や住んでいる場所（海）が共通し、どちらも他の生きもののくらしを支える重要な役割を果たしています。しかし、それぞれが歩んできた道のりが異なるので、「海草」と「海藻」は区別されているのです。今後「かいそう」を漢字で書く時は、それぞれのちがいを思い浮かべながら書いてみてください。